

軍事史学

第49卷 第3号

巻頭言

軍事史と医史学

酒井シヅ

ながらく筆者が専門としてきた医史学は、医学界の中でも知名度の低い学問である。しかし、その歴史は明治初期までさかのぼることが出来る。明治二十年代に富士川游（一八六五—一九四〇）らが中心に始めた新興の学問であった。そのときの主題は先人であるすぐれた医家を推薦することであった。自ずから医人の伝記が研究の対象であった。しかし、富士川は、明治三十七（一九〇四）年に大著『日本医学史』を著して、明治以前に発刊された医学書を軸に、それに関わる医人を重ねて、明治以前の医学史の全体像を明らかにした。本書は学士院賞の恩賜賞を受賞した。そのおかげで医史学はひとつの学問として社会的に認知された。そして、その後しばらく、医史学は富士川の医学史をベースに進んできて、昭和二（一九二七）年に日本医史学会が創立された。それから八六年、日本医史学会は会員八〇〇名余ながら続いている。

しかし、戦後、歴史研究は多面的になって、新しい医学史研究をもとめる人々が日本医学史研究会を発足させた。新しい研究会は活発に活動し、雑誌も発行していたが、いまは音沙汰がない。なぜ、巻頭言にこのようなことを書いたのかと不審に思う方もいるかもしれない。実は、軍事史学会を巻頭言の依頼を受けるまで知らなかった。そのとき、頭に浮かんだのが、おそらく、軍事史学会も戦後の時流の影響を受けたのではないかということであった。

日本医史学会では戦前はともかく、戦後は軍医関連はほとんど脚気関連の研究だけが話題になってきた。脚気問題は軍事というより、海軍の高木兼寛と陸軍の森鷗外の対立が話題の中心になっている。しかし、筆者は、かねがね日本の近代医学史研究には、軍事関係の研究が不可避であることを痛感していた。例えば、明治期の先端医療は大学より陸軍や海軍にその端緒をみることが多い。心電図など先端医療機器の輸入も軍隊が優先されたのである。それだけでない。濃尾地震を始めとする各種大災害も軍隊の活躍を抜きに真相を知ることが出来ない。幸いに陸上自衛隊衛生学校にそれらの資料が現存する。

一時、軍隊がタブー視されたため、医学史研究のテーマに軍事関連がなりにくかった。しかし、昨今は海外からの研究者が日本の軍隊の医学を調査研究したいという。幸いに、それに関わる資料が陸上自衛隊衛生学校や東京大学医学部、国立国会図書館などに残されている。それらの資料を散逸させないためにも、この方面の研究が盛んになることを祈念している。

（順天堂大学名誉教授）